

第1章 ● 五輸穴

第1節 五輸穴総論

1 概説

五輸穴とは、十二経脈の腧穴のうちでも、膝・肘関節よりも末端方向にある井・榮・輸・経・合の5種類の腧穴のことをいう。「五輸」とも略称され、各経に5穴、計60穴ある。五輸穴は内臓疾患や五官〔頭面部の鼻・眼・口唇・舌・耳の5つの器官〕疾患に対して独自の作用を発揮するため、臨床において幅広く運用される要穴（表1、図1、表2、図2）である。

五輸穴の名称がはじめて登場するのは、『靈枢』である。ただし『靈枢』九針十二原篇には「脈気が出るところを井穴といい、溜^{なが}れるところを榮穴といい、注ぐところを輸（輸）穴といい、行くところを経穴といい、入るところを合穴という」と説明されているものの、具体的な穴名と位置についてはまだ記載されていない。

一方『靈枢』本輸篇のほうには、心経以外の十一経脈の五輸穴の位置が明記されている。また『靈枢』順気一日分為四時篇は、人体の五臓にはそれぞれ対応する色・時・音・味・日という五変があり、その五変は井・榮・輸・経・合の5穴に振り分けることができると述べている。

また『靈枢』根結篇では、三陰三陽の「根〔始点〕結〔終点〕」の部位と穴名を詳細に述べたうえで、手足の三陽経の根・溜・注・入に相当するおもな腧穴をあげている。さらに『靈枢』衛氣篇は、手足の三陰三陽十二経の「標本」の部位と穴名を列挙するとともに、「根」や「本」に位置する五輸穴についても取りあげている。

『難経』六十二難・六十九難になるとさらに一步踏み込んで、五輸穴の陰陽五行

表 1 六陰經の五輸穴と五行配属表

六陰經	井（木）	榮（火）	輸（土）	經（金）	合（水）
肺（金）	少商	魚際	太淵	經渠	尺沢
心包（相火）	中衝	勞宮	大陵	間使	曲沢
心（火）	少衝	少府	神門	靈道	少海
脾（土）	隱白	大都	太白	商丘	陰陵泉
肝（木）	大敦	行間	太衝	中封	曲泉
腎（水）	湧泉	然谷	太溪	復溜	陰谷

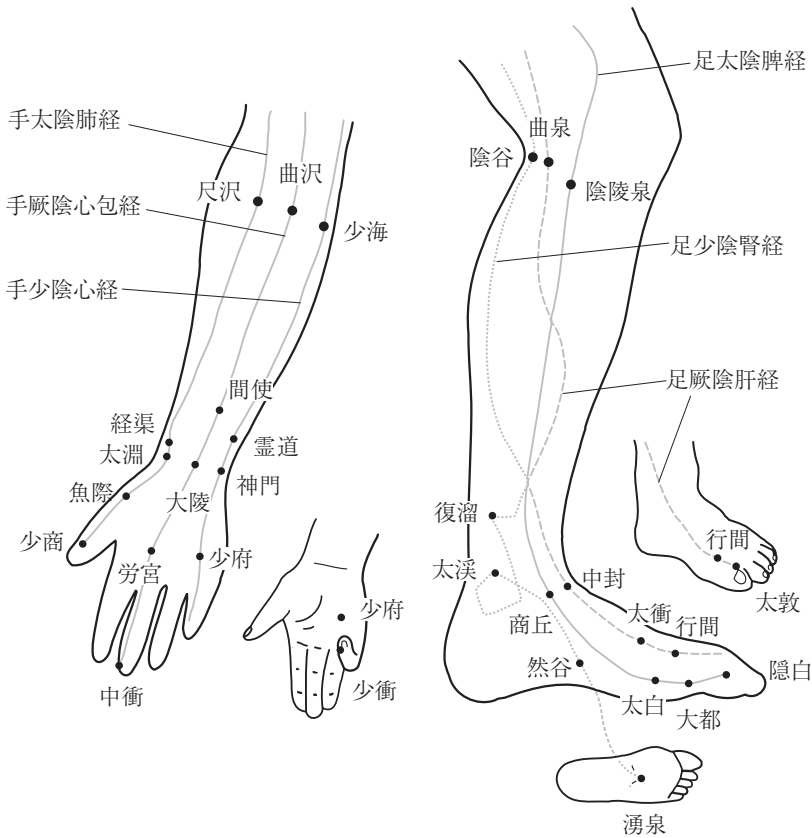


図 1 六陰經の五輸穴の分布図

属性を詳細に説明し、五輸穴の主治症や、補母瀉子・刺井瀉榮などの選穴法を記載している。その後『針灸甲乙經』が心經の五輸穴を補充するにいたって、五輸穴はようやく完成をみることとなり、その後の宋・元・明・清、歴代医家による五輸穴の理論研究および臨床応用発展の礎となった。ただし近世の五輸穴研究のテーマは、その作用に集中している。

表 2 六陽經の五輪穴と五行配属表

六陽經	井（金）	榮（水）	輸（木）	經（火）	合（土）
大腸（金）	商陽	二間	三間	陽溪	曲池
三焦（相火）	関衝	液門	中渚	支溝	天井
小腸（火）	少沢	前谷	後溪	陽谷	小海
胃（土）	厲兌	内庭	陷谷	解溪	足三里
胆（木）	足竅陰	侠溪	足臨泣	陽輔	陽陵泉
膀胱（水）	至陰	足通谷	束骨	崑崙	委中

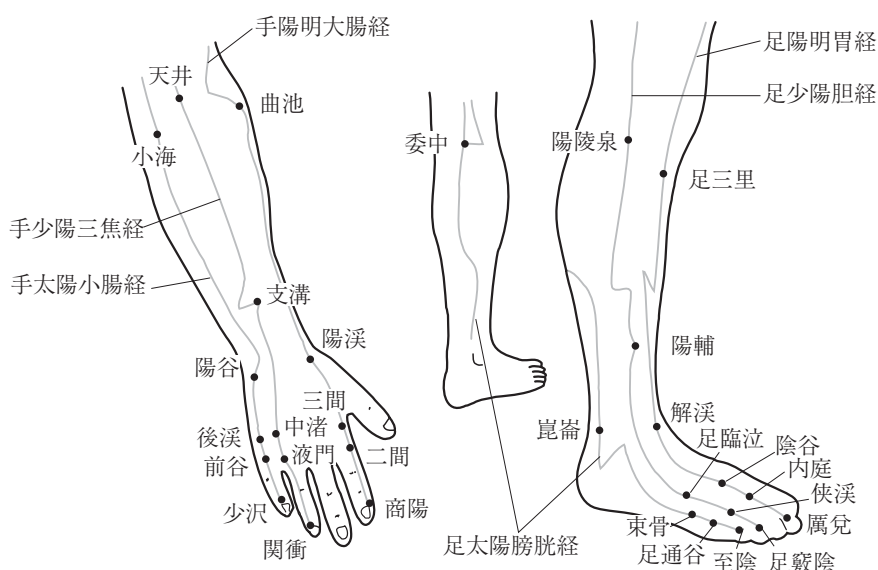


図 2 六陽經の五輪穴の分布図

2 具体的な名称と排列

五輪穴の具体的な名称については、『靈樞』本輪篇で見ることができる。本輪篇には、手太陰肺経など十一経脈の五輪穴の名称が記載されており、たとえば肺経の五輪穴については次のように説明している。「肺経の脈気は少商から出る。少商は、手の母指の内側にあり、井穴であり木に属する。次に脈気は魚際^{なが}に溜れる。魚際は、手の母指球にあり、榮穴である。太淵に注ぐ。太淵は、母指球から1寸上方の陷凹部にあり、腧〔輸〕穴である。経渠に行く。経渠は寸口部にあり、動き回って止まることがなく、経穴である。尺沢に入る。尺沢は肘の動脈部にあり、

合穴である……」。ただし手少陰心経の五輸穴についての記述はまだなく、代わりに心包経の五輸穴が記載されている。そのため『靈樞』九針十二原篇では五輸穴を、「五臓にそれぞれ五俞あり、合計五五二十五俞ある。六腑にそれぞれ六俞、計六六三十六俞ある」と述べ、計61穴（陽経の6つの原穴を含む）であると計算している。そして『針灸甲乙経』に至ってようやく、少衝・少府・神門・靈道・少海を、空白となっていた手少陰心経の五輸穴として補充している。

『靈樞』本輸篇によれば、六陽経は五輸穴の他に1つ原穴をおいているが、五陰経（心経を除く）では輸穴を原穴に当てており、原穴も五輸穴理論に含まれていることがわかる。陰経よりも陽経に原穴が1つ多い理由について、『難経』六十六難は「十二経がみな輸穴を原穴としているのは、なぜだろうか？ 五臓の輸穴とは、三焦の気が通るときに止まるところだからである」と述べ、また六十二難では、「臓の井・榮・輸・経・合は5つなのに、なぜ腑だけ6つなんだろうか？ それは腑が陽だからである。三焦は諸陽をめぐるので、もう1つ俞穴を設けて原穴と呼ぶのだ」と指摘している。原穴とは三焦の気の運行を主るものであり、三焦の気は六腑が主る諸陽経をめぐするため、陽経にはもう1つ原穴をおく必要があるのだが、陰経にはそれが必要ないため、輸穴が原穴となっているのだと説明している。陽経では輸穴と原穴とが別になっているが、輸穴を通る同じ気が原穴にも通るため、「陽経では原穴を治療すればすなわち輸穴を治療したのと同じであり、陰経でも輸穴を取穴するということは原穴を取穴するということである」と説明されている。

五輸穴が手足の末端から肘・膝までの間に、それぞれ井・榮・輸・経・合の順番で配置されているのは、どの経でも基本的には同じである。井穴の多くは手足の末端に位置し、榮穴は中手指節関節や中足指節関節の下方にあることが多く、輸穴は中手指節関節や中足指節関節の上方にあることが多く、経穴は手根関節や果関節より上方にあり、合穴は肘・膝関節付近にある。このような位置関係の共通性や、針感や主治作用に関する共通性は、内在的な要因によるものである。

3 理論的根拠

1 概念

『難経』八難は「十二経脈は皆生氣の源につながっている。生氣の源とは、十二経の根本である」と述べ、十二経脈すべてが原気とつながっていることを説明している。原気とは十二経脈の根本であり、すなわち両腎の間に内蔵される元陽の気である。原気は人体の生命活動に深く関わり、五臓六腑の本、十二経脈の根であり、また呼吸機能の要、三焦の源泉でもあり、病邪の侵入を防ぐための機能でもあるといえる。ここで述べている生氣の原とは、人体の生命活動を維持する根本の気であり、経絡の原気でもある。そしてこの原気の状態を反映するのが五輸穴であり、この四肢にある重要な腧穴である五輸穴に、各経絡の気の状態が現れるということである。

五輸穴の分布および排列の仕方には、一般的に標本・根結理論^{*1}が関わってい